



日野原重明記念

「新老人の会」東京 会報

Keep on going!

Vol.3/No.3

2021.7

コロナ禍の不安の中で

「新老人の会」東京 顧問 湯川 れい子



日野原先生と私の年齢差は、二十五歳。あれは確か、先生が八十七歳か八十八歳くらいの頃だったと思います。何かの仕事の件で、先生のスケジュール表を見せていただいてびっくりしたことがありました。次の年の予定が、もうすでに年末までびっしりで、希望していたあたりなど、新しい仕事が入り込む余地は全然ありません。「もう五年先までずっとこんな感じですからねえ」と、先生は涼しいお顔でニコニコ。私は思わず「えーっ、五年先っていったら先生は九十歳を超えておいでなのに、そこまでお元気で生きていらっしゃる自信がおりなんですか？」などと言ってしまった。今から考えると、ずいぶん失礼なことを申し上げたものだ、ひたすら赤面してしまうばかりです。先生はそれこそカンラカンラと声を立てて笑われて、「湯川さんだって、明日生きているかどうかなんて、誰にも解りませんよ」とおっしゃったのでした。でも大切な事

は、今ここで自分が仕事の申し出を断ってしまったら、そのプロジェクト自体が無くなってしまいかも解らない。仮にその時まで生きていられなくなったとしても、プロジェクトそのものが残っていてくれたら、きっと誰かがそれを引き継いでくれるに違いないのだから、「自分が五年先に生きていくかどうかなんてことを考えるよりも、よっぽど意味があるのではないかと思えますよ」と、楽しそうにおっしゃったのでした。

な存在を超えた、ひたすらポジティブな先生の考え方やお言葉に、大きな衝撃ともいえる感動を味わったのです。そして気がついてみたら、今年私は八十五歳。まだあの頃の先生の年齢に達してはいませんが、思いもかけないコロナ禍の試練の中で、日々さまざまなに押し寄せる難題にもみくちゃにされながらも、辛うじて元気に生きています。それでも、今後このままで、コロナはいつまで続くのか？果たしてこの状況下で、東京オリンピック・パラリンピックを開催したとして、日本は生き残っているのか？日本だけではなく、世界の経済的な疲弊や貧困の格差が生み出す対立や分断が、大きく火を吹くことは無いのか？などなど、ともすれば先が見えない不安に押しつぶされそうになります。



れど、日野原先生なら、どう答えてくださるのでしょうか。

そういえば以前、日本の憲法九条を守るにはどうしたらいいだろうと、右傾化していく政治について不安を口にした時、先生が言ってくださった言葉がありました。「湯川さんは、どうなったら良いと思うのですか？ぜひ十年先の自分の理想を言葉にして、必ずそうなる。そうする。とコミットメントしてください。そして今という時間に命を与えるのです。今できることを、精一杯やってみるのですよ」と。そう、十年先に自分が生きているかどうかではなくて、今大切なのは、自分の理想に具体的にコミットメントして、今という時間を、その理想に向かって、精一杯生きるということなんです。よね。先生、ありがとうございます。

湯川 れい子（音楽評論家・作詞家）

東京都生まれ、山形県米沢育ち。早くからエルヴィス・プレスリーやビートルズを日本に広め、独自の視点によるポップスの評論・解説を手がける。

また作詞家としても活躍。代表作には『ランナウェイ』『センチメンタル・ジャーニー』『六本木心中』『恋におちて』などがある。

また近年では、環境問題などを含め、次世代の育成にも力を注いでいる。

日本音楽療法学会・理事 / 国際連合世界食糧計画WFP協会・顧問

「日野原先生(のこころ)を継ぐ」5 死との遭遇



医療法人社団パリアン 理事長 川越 厚
クリニック川越 院長

突然死を除き、人は例外なく「死を前にして死と向き合う」経験を持ちます。それは自分自身が死ぬ時ですが、何らかの出来事に巻き込まれ生死の境を彷徨った末に生還するという、例外的な「死との遭遇」もあります。死に遭遇すると、人は自分の生を根源的に問い返しますが、死から生還した人の場合、その経験はその人のその後の人生に決定的な影響を与えることが多いようです。

力になりたいという私の願いは、死を前に苦しむ患者の力になるという形で「聞きとどけられた」のです。長い前書きになりましたが、重明先生の場合はどうだったのでしょうか。重明先生の人懐こい明るい樂觀的な人柄は生来のものだと思いますが、あの高潔な人格が形成される過程には、先生が死と遭遇し自分自身の死を見つめた経験が関わっているに違いありません。私はそのように信じていました。ことの真偽を確かめるためラジオNIKKIの番組取材という形で、先生のお宅を訪問したのは先生がお亡くなりになる四か月前の三月三日のことでした。

三十九歳の時結腸がんを患った私は、文字通り生死の境を彷徨いました。この経験は私に、「がん治療の専門医が死を看取るホスピス医になる」という劇的な変化をもたらしました。大学病院を去るにあたり私は「婦人科腫瘍学(一九九〇)」という教科書を上梓したのですが、その序文に一篇の詩を引用しました。その詩の後半には、『求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞きとどけられた』という一節があります。三十九歳の私が「求めたもの」は健康でしたが、神様から与えられたのは「がんになって死の淵を彷徨う」ということでした。しかし病で苦しむ人の



静子夫人と握手する重明先生
(1970年4月、58歳)

重明先生にとっての死との遭遇。それは「よど号」ハイジャック事件だった。「人のために生きる」この事件で、先生の「生き方」が変わった！

死と遭遇しても変わらなかった
重明先生の生き方

取材の目的は、先生が京都大学の医学部に進学されて間もないころ、結核を患って療養生活を送られた広島時代の話をお伺いすることでした。重明先生が若くして患われた結核は、一九三〇年当時、多くの人々の命を奪った、文字通り「死の病」でした。それ故、大変不遜な見方になりますが、私はインタビューに伺う前、広島時代の先生の療養経験は、先生の医師としての根本的な覚醒のきっかけになったのではないかと考えていたのです。

ところが先生は、「確かにショックだったが、その時、死をまともに意識しなかった。学校を休んだ時も休学届を出さなかったのだよ」と、私の思い込みを軽くいなされました。それはともかくとして、その時の過酷な闘病生活は、先生を根本的に変えたわけではないにしろ、医師としてのそれからの先生の歩みに大きな影響を与えたことは間違いありません。では死に遭遇するという経験を、先生はお持ちでないということなのでしょうか？

死と遭遇して変わった

重明先生の生き方

先生の自伝、『日野原重明 僕は頑固な子どもだった』を読んでいくと、私が求めていた答えがそこに記されています。舞台は一九七〇年三月三十一日に起きた「よど号」ハイジャック事件。

この時重明先生は五十八歳でした。医学生だった私は事件のことをよく覚えていますが、重明先生にとってこの出来事がそれほど大変なことだったとは、当時全く思ってもいませんでした。著書の『生きていくあなたへ』の中で先生は、その時の様子を次のように語っていらっしやいます。タラップを降り、地面に一步踏み出した時の感覚を生涯忘れることができません。

「これからの命は与えられたもの。これからは自分のためではなく、人のためにこの命を捧げよう」(p.95)「あの時、妻と一緒に泣きながら決意したことが、その後の僕の人生の支えになり、今日まで歩き続けることができたからです」(p.53)

重明先生はこの事件の時から一〇五歳でお亡くなりになるまで、この言葉通りの「人のために命を捧げる」人生を歩まれました。「先生は最初から神様のような方」と勝手に思い込んでいた私にとって、よど号ハイジャック事件に巻き込まれ、死に遭遇し、先生ご自身の生き方が変わったということは大変な驚きでした。しかしその事実を知ることにより、まさにこの事件こそ重明先生にとって「神の霊が注がれ、新たな幻、Visionが誕生するきっかけとなった時」だった、と思うようになりました。そのVisionの実現に向けてまっしぐらに進まれたのが、五十八歳を過ぎてからの先生でした。

コロナ禍を生きる

松岡 正治（八十六歳 東京都）

聖路加国際病院は、私にとって心の故郷（ふるさと）でした。礼拝堂には大学同期の井原司祭がおられ、何かと相談に乗ってもらいました。彼が臍臓がんを診断されたとき、日野原先生が聖路加の総力を挙げて回復させると明言されたことは、大きな力になりました。日野原先生は闇夜の灯台のような方でした。

ある時、会合で隣に座る機会があり、私の名刺をご覧になって「家の近くだね」と言っただけで握手をしてくださりました。奥様の弟さんと中学の同級でしたが、当時、彼は先生の隣の家に住んでいたのによく近況を伺うことができた。日野原先生の精神を受け継ぐ人が現れることを切望しております。日野原先生の著作などを紹介してくださると嬉しいのです。息子さんから先生の素顔を紹介してくださると皆様も喜ぶことと思います。

中井 素子（八十六歳 東京都）

「新老人の会」には、六十五歳だったと思いますが、発足と同時に入会させていただきました。最初にできたコーラス・サークル「コールバンダナ」に入り、桑原妙子先生にご指導いただきました。この間、「新老人の会」のイベントはもちろんのこと、横浜みなとみらいホールでの

年二回の合唱祭や、東京国際合唱コンクールにも参加して、数々の賞をいただきました。さまざまな経験をさせていただきました。

今は休止していますが、時折、桑原妙子先生からコメントが送られてきます。FM放送や、テレビ番組のすすめであったり、声を出すときの体の使い方についてです。一日も早く安心して楽しく歌える日が来ることを待ち望んでいます。

柴内 裕子（八十五歳 東京都）

日野原先生はお目覚めの時、「今日は〇〇へ講演に行くのだと思うと、ワクワクして元気が出るんですよ」と多くの方々とお会いになる嬉しさをお話しされていたことを思い出します。

三十六年前、世界の「人と動物との絆」の理念に基づいた動物介在活動（療法・教育）を（現）公益社団法人日本動物病院協会の責任者として獣医学を通じて社会に貢献するボランティア活動（CAPP活動）をスタートさせ、今日まで全国のチーム、獣医師の着実な活動のお陰で二万三〇〇〇回を超えました。二〇〇三年には日本で初めての小児病棟への訪問を聖路加国際病院小児病棟に迎えてくださり、日野原先生は、「動物の力は絶大ですよ」と小児総合医療センター長の松藤先生とセラピー犬と遊ぶ入院患児さんへの効果を評価してくださいました。

私は日本で最も古い女性獣医師として今日までさまざまな願いを、良き理解者のお陰で歩ませていただき感謝で一杯です。これからも脳が無事である限り、長年汚した地球への返礼の作業にも参加して参りたいと願っております。

福田 雅男（八十三歳 沖縄県）

私は聖路加国際病院で生まれ、戦争激化で茨城県南部の高台に疎開、一九四五年三月十日の東京大空襲は、冬晴れの見通しのよい夜で南西方面（東京下町）が火の海であったことを鮮明に記憶しています。

敗戦六年後に東京に戻りましたが、その頃、日野原先生がNHKラジオドクターをしておられ嬉しく思ったこと、三十四歳の時に聖路加で虫垂炎の手術を受けたこと。その後、書店で日野原先生の『死をどう生きたか』を見つけ、引き込まれるように読んだことなどが思い出されます。「新老人の会」には、日野原先生の言動に半歩でも近づけたら、幸せな人生を送れるのではないかと入会しました。

年齢とともに寒いのが辛くなり、定年退職後は沖縄に永住することにしました。コロナウイルスのパンデミックは、約百年前、亡き母の兄が沖縄でスペイン風邪になり亡くなったと聞いていたのですが、現実には起こると思ってもいいことでした。

鈴木 秀昭（六十三歳 東京都）
コロナ禍の昨今、勤務先での会合はオ

ンライン開催である。オンライン会合は短所もあるが、会場不要、参加者も交通費不要・時間の節約と長所もある。参加者は従来よりも増えた。会合のオンライン開催は、コロナ前からあったが、コロナが背中を押し、今や日常的に行われ、終息後も活躍することと思う。コロナ禍の「新老人の会」東京の活動は、会合の開催が思うようにできず、停滞気味に感じる。この状況を打開する鍵は、オンライン会合であろう。現状、全会員がパソコンやスマホを使える訳ではないが、今後、家族などの協力も得て、会員間交流の重要なツールとなろう。オンライン会合が、会の趣旨に添った活動の活発化に貢献することを期待したい。

前回号で徳植様のお名前に誤表記がありました。「徳植弘幸」と表記しましたが、正しくは「徳植弘幸」です。訂正して、お詫びいたします。

初めての俳句

五月メール句会 兼題「豆の飯」「体」

炊き立ては青き匂ひの豆ご飯 コッコ
豆飯の決め手は淡き塩加減 夢子
聖母月抗体検査の結果待ち 寛子
懐に葉書を抱いて走り梅雨 緑
鯉幟風を力に一文子 明子
蚊遣火の煙ふいと草書体 七厘
星々のやう矢車草蒼ければ まり
万緑やトランペットの老奏者 まえの
ぐうばあも体操のうち風薫る 蘭

（飛鳥 蘭選）

「布貼り紙芝居」でボランティア

原瀬サチ子

私は、若いころから趣味で人形制作を習っており、周辺の方々への贈り物としても喜ばれていました。子育て中に、絵本を布貼りし紙芝居にすることを思いつき、娘の幼稚園の謝恩会で「ねずみの嫁入り」を作って上演。続いて「赤ずきんちゃん」「かきじょう」なども作りました。舞台となるケースは主人が日曜大工で作ってくれました。その後、大学の公開講座で英語を学びながらホームステイを受け入れておりましたので、海外からのお客様にもご覧いただいたりしていました。

二〇〇六年のある日、日野原先生がテレビで「絵本の『勇氣』は、子どもだけでなく両親や祖父母のみなさんも一緒に読んでほしい」と思って九十一歳のときに翻訳しましたとおっしゃっていました。私は、『勇氣』を紙芝居にし、ボランティアで上演したいと、思わず先生に手紙を書いてしまいました。驚いたことに、すぐに承諾のお返事をいただくことができ、喜び勇んで制作に取りかかりました。

布貼り紙芝居は、五五cm×五〇cmの厚紙四十二枚に、つまようじを使い一枚一枚布を貼っていくため、途中で止めることができません。徹夜することも何度か。無我夢中で取り組み一年半がかりでようやく完成しました。



これを、地域のシルバークラブや友人知人にお見せしますと、次々と上演先を紹介してくださり、保育園、子ども会、老人福祉センター、小学校、大学、ケアプラザなどで上演することができました。保育園では、三十人の園児たちが、一枚ごとに「勇氣！」と大声で叫んでくれました。小学校では、先生方の「どの勇氣が心に残りましたか？」の問いかけに対し、子どもたちのさまざまな思いが返ってきます。日野原先生の奥深い翻訳が伝える力に感謝の気持ちが高まります。

光栄なことに日野原先生のピースハウス・ホスピス支援のためのバザーでも上演する機会をいただきました。十二月初旬の寒い日でしたが、握手していただいた日野原先生の温かな手に、深い感動を覚えました。コロナ禍の今こそ『勇氣』が必要なのではと強く思います。

京都大学 iPS 細胞研究財団 (CiRAF) への寄付

コロナ禍の私たちにも可能な社会活動として、前号巻頭言で呼びかけ、パンフレットを同封させていただきました。趣旨にご賛同いただき個人で支援された方もいらっしゃると思います。

寄付金受領証 発行日：2021年05月18日 入金日：2021年05月12日 住所：東京都千代田区一番町29-2 進興ビル4階 日野原重明記念「新老人の会」東京 御中 ¥ 120,000 - 上記を、当公益財団法人の主たる目的である事業に関連する寄附金として受領しました。 公益財団法人 京都大学 iPS 細胞研究財団 理事長 山中 伸弥 〒606-8397 京都府京都市左京区 聖蹟院川原町53番地 公益認定年月日：2020年4月1日 本寄附金は、所得税、一部自治体の住民税、相続税、法人税の控除対象となります。	
---	--

「新老人の会」東京としても支援したいとの声が上がリ、世話人会で協議を重ねた結果、賛助会員12万円を寄付することとしました。ここに感謝状と受領証をお示しし、ご報告とさせていただきます。年度ごとに継続するか否かを検討し、経済状況によっては中止することもできます。

朝日新聞（6/6付）「複数の民間企業が個人向けのiPS細胞をつくり保管するサービスを始めている」との記事の中で、山中伸弥先生が「iPS細胞研究財団は、公益財団法人として収益にとらわれず、高品質のものを良心的な価格で提供することをぶれずに続けていく」と話しておられます。個人向けiPS細胞の作製についても「my iPS」プロジェクトとして、2025年までに製造の効率化、自動化を進め100万円を提供することを目指しているそうです。



感謝状

日野原重明記念「新老人の会」東京 御中

このたびは京都大学 iPS 細胞研究財団に
多大なご支援を賜り誠にありがとうございました

賜りましたご寄付は iPS 細胞技術を産業界へ橋渡し
患者さんに医療として広く届けるために
大切に活用させていただきます

実用化に立ちあがる多くの課題を乗り越え
最適な医療を患者さんにお届けすることを最優先に
全力で走り続けて参ります

新しい医療への多大なご貢献に
深く感謝の意を表します

2021年5月18日

公益財団法人 京都大学 iPS 細胞研究財団
理事長 山中伸弥

「新老人の会」東京

2021年 会員数274人(204件)
2020年 会員数365人(307件)

会員募集中!

年会費

個人・家族会員 5,000円
賛助会員 (一口) 10,000円

編集後記

コロナ禍による長い自粛生活の上に、変異ウイルスの蔓延で不安が増していますが、ワクチン接種が進みつつあり、希望がもてるようにもなりました。感染状況が落ち着きましたら、少人数の集まりから活動を再開したいと期待が膨らみます。

早いもので、7月18日は日野原先生の4回目の命日にあたります。長きにわたり親交がありました湯川れい子先生に巻頭言をお願いしました。日野原先生の息遣いや温もりが感じられる文章に、喜んでいただけるのではないのでしょうか。「自分の理想を言葉にして、今できることを精一杯する」というメッセージを受けとめ、偲びたいと思います。